

ジェイムズ哲学における高次の経験論

feeling の作用領域と可能性を巡って

文学研究科哲学専攻博士後期課程 4110150004 藤坂大佑

〈論文要旨〉

本論は、ウィリアム・ジェイムズ (William James, 1842-1910) の諸著作を読み解きつつ、思想展開を跡付け、それらに通底する主題を明らかにすることを目的としている。その際に主軸となるのが、「感じ (feeling)」(ないしはそれに準ずる「感覚 (sensation)」) の、ジェイムズ哲学における機能的役割についての解釈である。

ジェイムズは初期の『心理学原理』から、最晩年の『多元的宇宙』に到るまで、あらゆる相貌を呈する「経験」をもっぱらその考察対象に据えていた。それは、単なる反射反応として捉えられるものから心霊体験に至るまで、多様な形であらわされている。しかしジェイムズは、その都度の自身の問題関心に引き寄せて、恣意的に何らかの経験を事例として取り上げながら考察を行った訳ではない。いずれの考察においても、その中心には「経験の多様な展開はいかにして為され得るのか」という経験の生成プロセスに対する問題関心があり、経験の多様な展開の契機として扱われていたのが「感じ」であったのである。以上の主張を基盤に据え、本論ではジェイムズ哲学の解釈が進められることとなる。

本論では、「感じ」の機能は認識的方向性(対象・世界を把握する、主体に既定的に備わる機能)と実践的方向性(行為の展開を可能とする、経験領域を拡張する機能)を有するものとして解される。ジェイムズ哲学は、前者の認識論的方向性が前面的に押し出されて解釈されることによって、多元論やプラグマティズムが相対的な真理論として一面的に受容されることとなった。そこで、本論では、以上の問題意識を念頭に置いて改めてジェイムズ哲学を考察し、従来のジェイムズ哲学の解釈において十分に焦点が当てられてこなかった、後者の側面に積極性を持たせつつ、その展開可能性を提示する。

基本的に、ジェイムズ哲学における「感じ」の概念は、知覚経験における原初的な状態として示される。意識経験においては、「流れ」として示される状態が意識の本来的な在り方とされ、「感じ」の機能は、その流れを構成する「実質的な部分」と「推移的な部分」の紐帯を成しており、意識の在り方を把握する際には不可欠なものである。この時点で、後の純粹経験の理論に繋がる「間断なき感覚の流れ」としての経験の在り方が提示されることとなる。純粹経験の理論においては、「経験を額面通りに受け取る」という根本的経験論的方法的公準が、「我々がそれを感じるままに把握するということであり、それについて抽象的な話をする」と混同しないということである」という表現で言い換えられており、「感じ」は、経験の根本的な在り方として示されている。更に、真理の位置づけをめぐる『プラグマティズム』においても「哲学とは宇宙全体の圧力と緊張を理解し感じる我々の個人的な方法なのである」として、哲学的営為を構成するひとつの機能として、その位置づけが示されている。

もちろん、それぞれの文脈で用いられている「感じ」の意味を一義的に収斂することはできない。特に心理学的側面においては、感覚器官による刺激の受容が経験の構成における第一の機能として論じられるが、こうした原初的な感覚と純粹経験の理論において論じられる「感じ」とを同一視できるかという問題も生じる。しかし、こうした諸問題を踏まえたとしても、経験の原初の状態において、論理的な合理性よりも個人の経験の内で、何らかの形で感得されるものが基とされていることは、ジェイムズ思想展開において一貫している共通事項として理解されるように思われる。

本論では、こうした「感じ」を機能的軸に据えたジェイムズ哲学が、潜在的な「実在(としての reality)」を経験内でありありと感じられる「現実性 (としての reality)」へと転回させるプロセスを主題とするものであることを最終的に提示する。これにより、ジェイムズ哲学における reality の位置づけに関する新たな解釈や、経験の発生場面を論じる「高次の経験論」としての展開可能性を問うことが課題とされる。

・本論の構成

第一章 心理現象の様相と感覚の機能 ——「感じ」の主題化に向けて——

はじめに、初期の主著の一つである『心理学原理』の内容に即しつつ、主に感覚論、意識論、自我論に着目しながら、ジェイムズ心理学における主題の確認や分析が進められる。それらをもとに、その中で把握される経験領域の問題や「感じ」概念の理解が、後のジェイムズ哲学の展開の起点として位置づけられることを論じる。要素還元的な捉え方では実質を汲み尽くし得ない意識の在り方として提唱された「意識の流れ」理論では、心理現象は、明確に捉えられる本質的部分のみならず、その周囲に辺縁構造（推移的部分）が常に伴っているという事態が説明される。この意識事象の理解が、後の『根本的経験論』に代表される後期思想群においては経験全体へと拡張される。こうした点も念頭に置きつつ、ジェイムズ哲学の展開基盤が構築された著作としての『心理学原理』の解釈が行われることとなる。

第二章 宗教的経験における「感じ」の拡張

『宗教的経験の諸相』において、ジェイムズは「自分の経験が何ほどか代用的なものだと感じる人は誰でも、まさにその経験を有しているさなかにおいても、それを超える経験をしているとってよいであろう」と宗教経験の本質について述べている。そうした神秘的な経験をし得る者は「しばしば神秘的な、思いもかけざるやり方でこの感受力が現れてくる」とされるような、受動的な形で得られるような特殊な感受性を有しているとする。こうした宗教経験における「感じ」の考察を軸として、個人的な経験的視点に根ざすものであり、個人のパースペクティヴの形成の起点となるものであった「感じ」が、個人のパースペクティヴという経験基盤すらも揺るがす契機となり得るものとして示される。本章ではこの特殊な「感じ」の解釈について、取り分け「実在の感覚」に関するジェイムズの記述に依拠しながら、『心理学原理』における生理学的なものとしての分析からは汲み尽くし得ない「感じ」の深層についての考察が行われる。

第三章 根本的経験論と純粹経験 ——「感じ」と経験の構造を巡って——

本章では、これまでの考察の内容を踏まえながら、根本的経験論の構造について概括する。根本的経験論の構造を論じるうえで鍵概念となるのが関係性の概念である。ジェイムズは、伝統的経験論や合理論

は経験同士の接続的關係を、それぞれ「分離」と「統一」という両極端なカタチで捉えており、それらは経験同士の關係性の程度の差異であると論じる。この關係性理論が、ジェイムズ独自の経験觀の構築基盤となっている。後半部では、第一章で論じられた『心理学原理』から引き継がれる問題となる「感じ」概念が根本的経験論においていかなる展開を示しているかを確認する。その後、本章のまとめとして、ドゥルーズ哲学との比較を行い、根本的経験論が、潜在的な経験が現働化するに至るまでのプロセスを捉える「高次の経験論」として把握され得ることを提示する。この方法論的基盤が、ジェイムズ哲学の展開可能性を見出すための一つの指標として位置づけられることとなる。

第四章 可塑的實在と経験のプロセス ——プラグマティズムと高次の経験論——

本章からはプラグマティズムを主題として、前章で論じた根本的経験論との理論的繋がりを論じる。第一に「なぜプラグマティズムで『経験』を問う必要があるのか」という問いに答えながら本章の立場を明確にする。特に昨今主流となっている分析哲学的立場によるプラグマティズム解釈に対して、本章では、初期プラグマティズムを代表する思想家であるパースやデューイの理解を踏まえながら、初期プラグマティズムにおいてはあくまで「経験」を軸とした真理論として確立されていたことを示す。プラグマティズムにおける経験の位置づけを確認した後、ジェイムズ哲学に立ち戻って、それがいかなる役割を果たしているか等といった具体的内容について考察してゆく。ジェイムズ哲学においてプラグマティズムは、實在に働きかけることで真理が形成するとされる「可塑的な實在論」として展開される。本章の後半部においては、その具体相の考察を通じることで、それが前章で瞥見された「高次の経験論」と同じく経験の生成プロセスを問う理論として把握され得ることが示される。それを展開させるには、実践的行為の文脈において扱うことが有効であるという可能性を最終的に提示する。

第五章 ジェイムズ哲学と‘feeling’—‘reality’の転回 ——ジェイムズ経験論の拡張に向けて——

これまで論じた内容を踏まえ、終章となる第五章においては、それぞれの議論で残された課題を検討する。そこで主題となるのは、心理学の展開としての多重人格論や、ジェイムズ哲学の最終体系として示される多元論的世界觀である。更に、シュスターマンやローティ、コノリーといった現代におけるジェイムズ哲学の受容者の解釈も踏まえながら、本論のジェイムズ哲学解釈が再び吟味される。ジェイムズ哲学に示される経験にまつわる問題は多岐に渡って展開されるが、本論ではその一つの帰結として、ジェイムズ哲学の展開は、経験における「感じ」の機能による「實在」と「現実性」の転回のプロセスとして捉え得ることが示される。ジェイムズ哲学は、「實在」が経験の只中において「現実性」として特殊化されるプロセスを論じる経験論として積極的に理解されるべきであり、それによって、ドゥルーズの超越論的経験論と同様、「潜在的なものから顕在的なものへ」という発生プロセスを問う「高次の経験論」としての展開可能性を内包していることが示される。この点から、ジェイムズ哲学において意味が拡張的に捉えられてしまっており、その内実が捉えがたいものとされていた‘reality’概念の解釈についての一定の見通しが与えられる。

以上の諸考察を通じてまず明らかとなるのは、本論の主題の一つであるジェイムズ哲学における「感じ」の機能的射程である。ジェイムズ哲学における「感じ」の機能については、これまで明示的に主題化

されることは無かった。それはジェイムズ自身がそれに明確な定義を与えておらず、文脈によってその意味合いが異なっていることに起因するものであると思われる。本論ではそれらを統一的に解釈するのではなく、むしろ文脈ごとにいかなる働きを有するものとして論じられているかを個々に取り上げつつ考察することによって、その機能の根幹には、「實在」を「現実性」へと転回し、経験領域を拡張させる契機が据えられているという仮説が立てられる。これにより、意識論や宗教現象、プラグマティズムといった多岐に渡る問題群の考察が為されているジェイムズ哲学は、常に経験の生成変化の動的な過程に主眼が置かれていたことが副次的に提示される。「實在」が「現実性」として経験に顕在化する場面は、それが動的な過程である以上、行為としてのみ論じられるものであり、認識論的な、静態的な主客関係の構図では捉えられない。そうした経験が生成される場面が、ジェイムズ哲学においては「感じ」の機能を中心として把捉されていたのである。

また、本論の後半部においては、その展開可能性としてドゥルーズやベルクソン等の系譜に属する「高次の経験論」として、ジェイムズ哲学を解釈する方向性が示されることとなる。本論で繰り返し主張される「ジェイムズ哲学における『高次の経験論』としての可能性」とは、ジェイムズ哲学に内在する経験の生成プロセスについての理論を、行為の形成理論として解釈を推し進めることを示している。「感じ」によるリアリティの転回という経験の形成プロセスを明瞭な形で理論化することによって、経験の形成において何が具体的に有効化されるかという実践的な視点から、プラグマティズムの新たな意義を見出すことが可能となるであろう。以上の点が、最終的に示される本論の展開見込みである。